

■今月の特選句

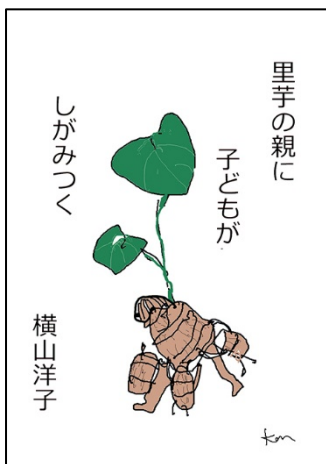
2019年12月



ペナルティーキックに北風として加勢

柳 紅生

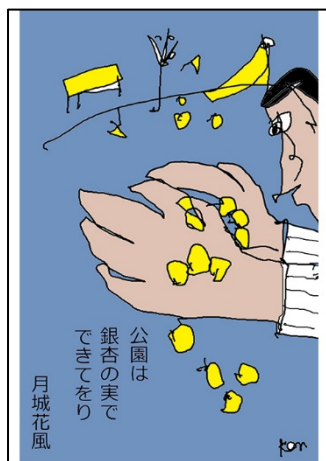
北風を擬人化して巧い。勝敗は時の運であるとか、運も実力のうちなどというが、北風がチームのサポーターだったとは気が付かなんだ。



里芋の親に子どもがしがみつく

横山洋子

擬人化して写生したところに巧みさがあるね。親芋に懸命にくっついている子芋の健気さがある。自身のこととも、子どもと孫のこととも読める。



公園は銀杏の実でできてをり

月城花風

俳句は理屈でなく直観でつくるもの。夥しい銀杏の実に銀杏公園じゃわいと思った。思い込みの延長線上に誇張があり、それが詩にもつながる。



秋の陽にあたれば人も渋み抜け

荒井 類

陽にあたれば柿の渋が抜ける。ならば人間だって同じこと。同僚知人から渋い存在として一目置かれていたが、秋の陽に腑抜けにされたらしい。



風邪の神舞台の袖で出番待つ

田村米生

できれば登場しないでもらいたいが出番が来たね。舞台のタイトルは、「万病の世界」。万病の元という風邪の神が主役で大暴れ。効果音は北風。



のるたちでやれラグビーだサッカーだ

山本 賜

いわゆる「にわか」というやつだね。あら山本さん眼が赤いわよ。ああ、いえ、遅くまでテレビで応援なんかちょっとしかしてません。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

AIに負けてたまるか文化の日 ・・・いざ勝負せむ滑稽俳句	堀川明子
来年もこの世の予定日記買う ・・・あの世の予定想定外で	青木輝子
駄洒落から本音読み取るおでん酒 ・・・それがほんとの聞き上手かも	稲葉純子
式部の実絵巻めくれば零れけり ・・・この世のものと思へぬ紫	工藤泰子
渋柿や追熟を待つ与太鳥 ・・・与太だからこそ悪知恵働く	柳村光寛
ささやかに福引き寄せる小熊手 ・・・大切なこと足るを知るのは	南とんぼ
死出の旅許されし身の枯葉かな ・・・舞ひ降りるさま楽しさうにも	山下正純
松茸飯に松茸探す箸の先 ・・・匂ひはしてもかたちのなくて	小川鈍太
早々と還り給ひし貧乏神 ・・・小銭ためてもすぐになくなる	高橋きのこ
白足袋の目にちらついて眠られず ・・・それがいはゆる煩惱なのよ	下嶋四万歩
鶏頭花生きる約束の種こぼし ・・・神の指示てふ種の保存なり	鈴木和枝
ペン胼胝は死語となりけり文化の日 ・・・耳の胼胝なら今も健在	廣田弘子
鴟の贅食い詰め時の非常食 ・・・鴟にもあるや緊急事態	泉 宗鶴

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

秋遍路足早に去る誦経して
 大野ヶ原の黒土付きの大根買ふ
 風と去る風にのり来し秋の蝶
 要注意スリも来てます年の市
 うそ寒し反面教師おやじの背
 竜淵に潜むと知るやドロップゴール
 灯火親し息子に借りる人生訓
 控へ目に言へば好きです柿羊羹
 秋の夜や猫ちゃんづけで呼ばれたる
 葡萄食べし後(のち)や花火のごとき茎
 わが影を纏ふ枯葉のコロコロと
 人の世に未練残して返り花
 新米の炊ける匂ひに腹の虫
 光頭の残り毛惜しむ十三夜
 昭和残照いついつまでも高校三年生
 黄金田の一面見事稲筈
 散らす孫叱れずに夫小豆干す
 木瓜の実に瓜実顔の一つあり
 秋の雨男河童太郎の川流れ
 付度や御意御意の飛蝗かな
 思ひ出せないこの木なんの木松手入
 長月は和製英語でロングムーン
 牡蠣食へば鐘も鳴らない天王寺
 目があつて火に炙られて青秋刀魚
 茸山近道寄り道獣道
 敬老日席を譲りて辞退され
 能書きを消化不良で風邪薬
 漱石忌には猫も私も無関心
 虫食いはブランドのセーターばかり
 四つ角で左右見る犬秋夕日
 松茸のご飯はプラス五百円
 メイキャップの血みどろをかしハロウィンダンス
 ハロウィンのお化けの口に虫歯かな
 秋晴の空気を満たしバスウキウキ
 秋の蚊に目をつけられて勝手口
 物忘れしたこと忘れうそ寒し
 木の実ふる強風の枝道づれに
 秋寒にモヘヤ羽織りてをりにけり
 蠮螋の足どりよろり草むらへ
 背をまるめ丸き銀杏拾ふ母
 即位パレード原爆ドームに日も笑ひ
 つくづくし結局何が言ひたいの
 秋深し試食巡りのフルコース

相原共良
 相原共良
 相原共良
 青木輝子
 青木輝子
 赤瀬川至安
 赤瀬川至安
 赤瀬川至安
 荒井 類
 荒井 類
 井口夏子
 井口夏子
 井口夏子
 池田亮二
 池田亮二
 石塚柚彩
 石塚柚彩
 石塚柚彩
 泉 宗鶴
 泉 宗鶴
 伊藤浩睦
 伊藤浩睦
 伊藤浩睦
 稲沢進一
 稲沢進一
 稲沢進一
 稲葉純子
 稲葉純子
 井野ひろみ
 井野ひろみ
 井野ひろみ
 上山美穂
 上山美穂
 上山美穂
 梅岡菊子
 梅岡菊子
 梅岡菊子
 梅野光子
 梅野光子
 梅野光子
 太田史彩
 太田史彩
 太田史彩

色なき風寺神社教会梯子して
 コスモスやベビーカーの子とハイタッチ
 菊の香の薄らぐほどの外国人
 松茸のまの字も見えず土瓶蒸し
 秋天に笑顔の弾け従妹会
 天狗岳目指す黙々紅葉の
 冬日浴びマリオネットの影の憂し
 冬眠の準備にあらむ身の肥ゆは
 綿入は母の形見や老いの朝
 千葉県に裏を返しに颱風来
 先祖代々地球生まれで銀河育ち
 雨も風もほどほどとなり松山の野分
 飛び越える木犀の浮く水たまり
 初霜に水害の人の身のかたし
 CMにせかされ新米「ひめの凜」
 子ども神輿の弾めばご祝儀大奮発
 お礼飯運動会の招待に
 神無月郵便受けて待ちぼうけ
 勤労の日一億人火の玉となれ
 年の末枕の下に観音経
 居眠りの妻の額に蚊の残り
 秋の旅幾度も時刻尋ねられ
 咲いたよと金木犀が立っている
 腰かけて猿の腰かけ壊しけり
 多才なる白式部の実ままごとの
 秋天も並木も巴里のほひかな
 私は鯛世に流されて泣いてゐる
 まばたきを交はしあふてふ秋のてふ
 狸汁舌と腹とがコラボする
 里山の犯行声明鴟の贅
 すき焼の奉行リコールされにけり
 出不精を犬が引っ張る秋の空
 大根の双葉本葉となるつもり
 実を鳥に食べられ千両艶を増す
 熊たちの食い散らかした柿拾う
 「スカーレット」信楽狸は徳利下げ
 千曲川旅情お預け秋出水
 茶室より大音響の嚏かな
 老い払ふごとく落葉を掃きにけり
 林檎剥く美味いと妻の腹に消ゆ
 利き酒の名人自称下戸の口
 突如咲き不満吐き出す彼岸花
 あんぱんを二つに割って喰ふ厄日
 二つ置く目覚時計燈火親し

大林和代
 大林和代
 大林和代
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 小笠原満喜恵
 岡田廣江
 岡田廣江
 岡田廣江
 小川鮎太
 小川鮎太
 加藤澄子
 加藤澄子
 加藤澄子
 門田智子
 門田智子
 門田智子
 金城正則
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 桑田愛子
 小林英昭
 小林英昭
 小林英昭
 近藤須美子
 近藤須美子
 近藤須美子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 下嶋四万歩
 下嶋四万歩
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義

百均の紅葉で飾るウィンドウ
 富有柿の尻上にして並べられ
 一株の里芋どなたと分ける 秋の空
 悟空が乗った雲頭上に来てひと休み
 初猟や仕事忘れて犬は恋
 赤い羽根鳥も厄なりもうケッコー
 愛犬を話し相手に日向ぼこ
 雪女になるには若し青女
 新酒には無縁の婚家珈琲香
 横だけが伸びる頭髮残り霜
 マスクして隠し切れなき皺減らす
 世間見ずふやして寒きスマホかな
 柿食はぬ顔して烏柿の木に
 カラフルな傘を開けば放屁虫
 献血の四百CC台風来
 蟪蛄や耳鳴りの耳を刈りとれ
 旅人のトイレをさがし天高し
 名を成せぬことの無念や残る虫
 三婆の駄弁る墓場や大西日
 ヴィオロンの溜息かとも秋の雨
 卒寿なり威風堂々稲刈機
 幼子のめそめそ嫌がるむかご飯
 枯蓮に人の終末らしき景
 山眠り娘の義母は身罷りぬ
 告げるのは金木屋の散ってから
 衣被いやよいよよと身をくねる
 鳳仙花噂の種を撒き散らし
 松茸や閉店前も手は出せず
 天高し天井よりも心太
 思い出の出前迅速金木屋
 雨男何人いたか嵐去る
 観るだけで食へない花や女郎花
 台風一過雨水居座る遊歩道
 一つ消し二つ点して長き夜
 爽やかや駒音高く将棋塾
 秋夕べ老人ホームに爪切る音
 牡蠣飯にスコッチをそへ亡夫の忌
 風呂の窓眼鏡なくともオリオン座
 金銀を誇示したりせず木屋花
 鰯雲からりと揚げてビール飲む
 食の秋増える支出を贅肉に
 鰯など一尾も見えず秋の空
 秋桜祭り二部咲き折角来てみたが

鈴鹿洋子
 鈴鹿洋子
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 高田敏男
 高田敏男
 高田敏男
 高橋きのこ
 高橋きのこ
 竹下和宏
 竹下和宏
 竹下和宏
 龍田珠美
 龍田珠美
 龍田珠美
 田中 勇
 田中 勇
 田中 勇
 田中早苗
 田中早苗
 田中早苗
 田中晴美
 田中晴美
 田中晴美
 田村米生
 田村米生
 月城花風
 月城花風
 土屋泰山
 土屋泰山
 土屋泰山
 飛田正勝
 飛田正勝
 飛田正勝
 橋本愛子
 橋本愛子
 橋本愛子
 花岡直樹
 花岡直樹
 花岡直樹
 林 桂子
 林 桂子
 林 桂子

満月へスクランブルの戦闘機
 秋灯やおつさんどもの立飲み屋
 赤まんま仏の母へ一つかね
 輪塔の先に雲刺し初時雨
 嘴疵(はしきず)に赤き声挙ぐ柘榴の実
 半人前の子に意見され敬老日
 歯ざわりで口楽します菊脛
 いちじくのつまめばゆがむいくちなく
 団栗の人に拾はせたくする形
 マルチーズの白を染めるや秋夕焼
 秋憂ふ逆立ちて観るひとの世に
 膳の上絶景となる食の秋
 冬ぬくし日本中の猫寝んね
 釜飯をみんなが頼む食の秋
 台風や叶わぬ敵と神頼み
 訳ありの林檎の山が苦笑い
 そぞろ寒慌て五体が縮こまる
 心臓の剛毛よそこに木葉髪
 血糖値低いのだらう秋の蝶
 賽銭が少ないからと留守詣
 断捨離を急かされてをり银杏散る
 秋の日を捕まえておき鬼ごっこ
 そぞろ寒財布のヒモを締め直す
 忘年会大笑いしてみな忘れ
 秋思いま明日へ溶け出す二十四時
 大熊手車中の福を抜きん出て
 願ひなほ大器晩成日向ぼこ
 太陽のそつぽ向きたる青写真
 鮫鰯を捌くムンクの口をして
 大方は隣の落葉髭浮かぶ
 日向ぼこ夫婦の会話かみ合はず
 襟巻や騙され続け二十年
 マスクしてまだまだしゃべる彼の女
 裾分けの巡りめぐりて豊の秋
 磨かねばただの石くれ星月夜
 迷ひ込む街路色葉のファッションショー

原田 嘩
 原田 嘩
 原田 嘩
 久松久子
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 日根野聖子
 廣田弘子
 廣田弘子
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 堀川明子
 堀川明子
 本門明男
 本門明男
 本門明男
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 椋本望生
 村山好昭
 村山好昭
 村山好昭
 百千草
 百千草
 百千草

冬の月ふるつとふるえ雲を着る
 肩こりのころあたりや熟し柿
 くすぐりにうつかり離れ銀杏の実
 一冊は詩集と決めて秋惜しむ
 不意打ちが得意の技で木の実降る
 本物の自然薯やつばり味が濃い
 雪女来てをり父の自分史に
 歌麿のをんな装ふ雪女郎
 湯場所望すつぼんぼんの雪女郎
 境内で君は銀杏拾う神
 行く秋を気付かぬ人と気付く人
 冬めくや競歩のごとき家路かな
 風花の無重力めくエレベーター
 恙なし小春色なる内視鏡
 三万も三百万も錦鯉
 どっちみち傾ぐ定めのレストラン
 うどん屋の列そわそわと神無月
 ふるさとに神在月のバスの列
 立冬の予防接種の列長し
 コスモスの風を揺らして咲いている
 綿雲を笠に仕立てし初冠雪
 ビとよめばビだつたりしてぶれる秋
 焼そばときめてきたのに牡蠣フライ
 笑い茸食はしてみたき親父かな
 猪の走りまわれる市となりぬ
 縁側のなく緑なき里祭
 秋うららユンボ地球を傷つける
 しばらくはその香を嗅いできのこ飯
 人形に菊師のこだわり菊花展
 いつの間に夜具たぐり寄す夜寒かな
 湖の一面燃やす紅葉山
 王様となりて闊歩や萱の原
 冬隣スフレみるみる縮こまる
 ふぞろひの林檎の芯も星となる
 月光に憑かれしごとく楽師舞ふ
 「おい」なんて名前呼んでよ吾亦紅
 毛布を干せばアンパンマンが宙を飛ぶ

森岡香代子
 森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健
 八洲忙閑
 八洲忙閑
 八洲忙閑
 八塚一青
 八塚一青
 八塚一青
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳村光寛
 柳村光寛
 山内 更
 山内 更
 山内 更
 山下正純
 山下正純
 山本 賜
 山本 賜
 横山喜三郎
 横山喜三郎
 横山喜三郎
 横山洋子
 横山洋子
 吉川正紀子
 吉川正紀子
 吉川正紀子
 渡部美香
 渡部美香
 渡部美香
 和田のり子
 和田のり子
 和田のり子